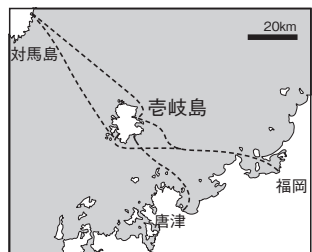


祖父の暮らす島でパン屋を開業

パンブラス代表 / イターーン 大久保 卓哉



壱岐島：玄界灘にある面積139km²の島。人口26,986人(平成29年7月現在)。古くから大陸文化の中継地として重要な位置にあり、「魏志倭人伝」には「一支国」と記されている。島の南西部にある国内最大級の弥生環濠集落「原の辻遺跡」をはじめ、島内には縄文・弥生時代の遺跡が多い。

野球選手からパン職人へ

福岡県春日市で生まれ育った私は、幼少の頃から野球漬けの日々を送ってきました。県内の私立高校に進学し、高校一年生の時には甲子園、山口県で過ごした大学時代は全日本選手権に出場、さらに中国六大学の選抜チームに招集された私の頭の中はつねに野球のことでした。

しかし、そんな中で肩を負傷してしまいプロ野球への道を諦めざるを得なくなっていました。就職活動を行ったものの、ほとんどが一次選考落ち。路頭に迷っていた私に、大学の球場まで視察に来てくださった、株式会社リョーユーパンの野球部元監督が声をかけてくださり入社したことが、パンとの出会いでした。

入社後は会社の一員として、さまざまな上司、先輩、協力会社の方々と出会い、五年間勤務しました。

祖父母は壱岐島に住んでいましたが、祖母が早くに亡くなり、祖父は長年一人暮らしをしていました。そんな祖父は、身体の不調から透析治療が必要となり、家族の誰かが一緒に暮らして介護をしようと家族会議を行いました。この出来事が島への移住を検討するきっかけとなりました。

当時、私自身、パン屋として独立してみたいという野心もありました。そして私の中では、島でもうまくやっていたらという根拠のない自信もありました。振り返ってみれば、他の独立開業される方々と比較すると、安易な気持ちだったのかもしれない。ただ、パン屋を開業することで、祖父の楽しみの一つにもなれるのではとの考えも



島の南部、山の中腹に佇む「パンプラス」の外観。

あつたのです。

家族会議から半年もたたぬうちに移住を決意し、昨年(平成二八年)の二月に壱岐島へやってきました。そして、公庫からの借り入れなどを活用し、同年四月、祖父の自宅近くにパン屋「パンプラス」を開業することができました。店名にはパンだけ作れば良いというのではなく、それにプラスしてお客

様や従業員に向けての気配り、心配りができる満足度の高い店づくりをしたい、という思いを込めています。

また、今年二月には、土産物屋が集まる「あまごころ本舗」(郷ノ浦)内に、島内二号店もオープンさせることができました。

壱岐弁プロジェクトに参画し、活動を拡大

壱岐市が取り組んでいる「壱岐弁プロジェクト」(※註)は、島に恵まれた食材があるにもかかわらず、島内加工による付加価値を生み出すことができていないという課題に対して、調理というひと手間を加えることで、地元の産業活性化と雇用の創出を図るとともに、島の魅力を島外に発信する、というものです。

趣旨に共感した私は、このプロジェクトに参画し、昨年一月の料理コンテストではエントリーした惣菜パンを優秀賞作品に選んでいただきました。

さらにその翌月には東京にある長崎県のアンテナショップでテストマーケティングを行い、続けて私の地元である福岡の岩田屋本店や、首都圏での販売を行いました。

また、それに加えてテレビ出演や雑誌掲載、他県からのイベント出店依頼などのお話をいただくようになり、五カ月間で一〇回の島外出店を行うことができました。

そんな中で従業員とともに感動したのは、今年六月の東京出店の時です。全国の有名な店舗が集まるイベントの中、壱岐牛を使用したカレーパンを一日に一六〇〇個完売する

(※註) 壱岐弁プロジェクト…「壱岐市商品開発・販路開拓支援プロジェクト」として、国土交通省の離島活性化交付金を活用し、平成二八年度から実施。



「パンプラス」の店内には焼き立てパンの香りが広がる。



今年6月、東京で開催されたイベント内で1日1,600個売れた「香岐牛カレーパン」。

ことができました。もちろん目標を達成したことは嬉しかったし、それだけ多くのお客様に島の魅力をアピール出来たことも嬉しかったのですが、感動を覚えたのは、完売までのプロセスです。島内の他社、香岐市役所、長崎県香岐振興局などさまざまな業種の方が同じ方向を向き、当店の商品を一所懸命アピールしてくれている姿には、胸を打たれましたし、忘れてはいけない光景だと思いました。

一方で、さらに販路を拡大していく上では、島の食材が量産に追いつかないという点と、島内に求職者が少ないという課題があります。

そこで、開業当初から、毎月パン教室を行ったり、学校と連携し、ものづくりの魅力を伝えるようにしています。そうすることで、過疎化の防止や当店が高卒求人を受け皿になりたいと考えています。

私の思いとパンプラスの未来

私の仕事の将来像に、ゴールや最終地点はありません。つねに進化を求め、経済、市場の流れをよみ、少しずつ、**「夢」を「目標」に変えていきます。**「大きな夢を小さな目標に変え、即実行する脳をつくること、同時に従業員満足度を向上させること」企業の発展」と私は考えています。

島の活性化に必要なことは、きれいごとだけでは片づけられません。各事業所がどれだけ利益を上げ、従業員の所得を上げ、元気づけられるか。香岐というブランドを有効活用し、「香岐でもできることは何か」ではなく、「香岐だからできることは何か」にシフトチェンジするだけでさまざまなことが見えてきます。

今後は、地域に愛される会社づくりを目指す一方で、島外の方々が「パンプラス」と聞けば香岐と連想できるように行動し続けたいと思います。

行政からのメッセージ

◎起業プラス移住で壱岐島にプラス(実り)をもたらす

「いらっしゃいませ！ありがとうございます！ありがとうございました！」

お店を訪れると、小気味よい挨拶と、焼き立てのパンの香りで温かく出迎えてくれます。

昨年、島への移住と同時期に店舗・パン工房を構えた「パンプラス」代表の大久保さんは、移住からわずか2年弱、熱い思いを日々形にし、エキサイティングな挑戦をし続ける男性です。

もちろん、一緒に移住されたご家族やスタッフの皆さんも、代表と同じ目線でのづくりに取り組み、地域に根差した活動をされています。

大久保さんの場合は、孫ターン(祖父母に縁のある地に移住)という形ですが、この島に事業の地盤があるわけでもなく、ゼロからのスタートということもあり、独立にあたっては、心配の声が少なくなかったと聞いていました。開業後、直接お話しをした最初の印象は、屋号のとおり良い意味でプラス思考を持った方だなというものでした。

行政が関わらずとも、定期的にパン教室を開き、店舗の駐車場で異業種交流や、さまざまなイベントを催し、地域の拠点づくりに積極的に取り組まれています。移住者という枠を軽々と超え、住民のひとりとして活躍される姿を目の当たりにしています。

移住の受け入れで、頭を悩ませることの一つが、行政ならではの「平等性、公平性」です。一律に公平に扱わないといけないという思いが時に邪魔をし、個々に応じたサポートが充分にできないこと

があります。そんな時、島と移住者とを仲介してくれる人物がいれば、大きな助けになります。必ずしもそうとは限りません。

Uターンされた方であれば、ある程度島のことを理解し、ネットワークも一定程度持っている方が多いのですが、行政のサポートとして、Iターン移住者の相談体制や受け入れ態勢は、まだまだ整備が必要な状況にあります。

一方で、有志が集まって、自然発生的に人と人をつなぐ環境づくりをされているIターンの方々もいらっしゃいます。今後は行政と民間とで役割分担をしながら、出会いを大切にしながら、壱岐島の人づくり、場づくりを課題として、サポート体制を深化させていきます。

壱岐島は福岡市の博多港から約1時間でアクセスが可能な位置にあります。本市では、この地理的な資源を武器に、新たな取り組みとして、福岡都市圏の方が島で働くことができるテレワークセンターを開設しました。そこに誰でも利用が可能なコミュニティスペースを今後併設する予定です。

大久保さんのような、地域活動に取り組み挑戦し続ける人を支援できるように場を整え、人をつないでいくことも定住支援に係る行政の一つの役割だと考えています。

人と場をプラス(足し合わせ)することで、実りをもたらす壱岐の島づくりに注目していただければ幸いです。

(壱岐市地域振興推進課 定住促進担当 中野士郎)

大久保卓哉 (おおくぼ たくや)

昭和63年福岡県春日市生まれ。福岡県内でのパン製造会社勤務を経て平成28年に祖父の住む壱岐島に移住し、山の中に佇むパン屋「パンプラス」を開業。